

令和元年6月7日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02316

研究課題名(和文) 王政復古期演劇と政体の危機

研究課題名(英文) Restoration Drama and Political Crises

研究代表者

末廣 幹 (Suehiro, Miki)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：70264570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、王政復古期イングランドにおいて活動した劇作家が、王位継承排除危機と名誉革命という政体の危機をどのように表象し、演劇がどのように変容したのかを考察した。王位継承排除危機によって今日の二大政党制の起源となる、トーリーとホイッグという対立する党派が生まれたのだが、それぞれの党派を支持する劇作家が、政体の危機に対峙する上で、どのように恐怖や不安を煽り、諷刺し、どのように新たなジャンルを生み出したのかを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、王政復古期演劇が、王位継承排除危機と名誉革命という政体の危機の表象を通じて、どのように新たな表現のためのヴォキャブラリーやパターンを生み出し、18世紀演劇へと連なる新たなジャンルを生み出したかを考察した。従来も、政治的危機と演劇との関連を論じた研究はあったが、それらは王位継承排除危機に特化し、演劇をトーリーもしくはホイッグのイデオロギーのプロパガンダとみなしがちであった。トーリーとホイッグとは、今日世界的な多様化と分断の潮流のなかで危機に陥っている二大政党制の起源であるが、本研究は、その原点に立ち返って、演劇が政治との対峙においてどのような役割を果たしたのかを考察した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated the complex ways in which dramatists working in Restoration England represented such political crises as the Exclusion Crisis and the Glorious Revolution and how drama changed through these crises. The Exclusion Crisis produced two opposing factions, later to be political parties, Tory and Whig. I discussed the ways in which Tory and Whig dramatists awakened fear and anxiety in representing these crises and produced a new genre of drama in satirizing the crises.

研究分野：文学

キーワード：イギリス演劇 王政復古期 政治

## 研究成果報告

### 1. 研究開始当初の背景

#### 研究の学術的背景

本研究の対象は、王政復古期における王位継承排除危機と名誉革命という政体の危機の演劇的表象である。王政復古期という時代は、1642年に国王派と議会派とが対立することで勃発した内乱と1649年の国王チャールズ一世の処刑を経験しており、内乱期という深刻な社会的動乱の記憶を維持しつつも、それをいかに忘却に付すかを腐心せざるを得なかった。しかしながら、国王チャールズ二世の王位継承者ヨーク公ジェームズがカトリック信仰を公言するに至り、カトリック教徒による専制政治が実現するのではないかという不安が高まり、ジェームズを擁護するトーリーとそれに異を唱えるホイッグとが激しく対立した、王位継承排除危機と呼ばれる混沌状態が再来し、ジェームズが国王ジェームズ二世として即位した後には名誉革命が起こりジェームズは王位を追われ、プロテスタント体制が成立する。つまり、王政復古期は、内乱の再来という影に怯えながら、二度の政体の危機に対峙することで、そのような対立を議会というアリーナにおける党派の討論へと変換する術を学んだ時代であった。

申請者は、これまで『『コーヒーハウスの政治家』の誕生 王政復古期における公共圏の変貌』(2002年)や「“in the dark... there is no envy or scandal” ウィリアム・ウィッチャーリーの『迷える恋、あるいはセント・ジェームズ・パーク』における空間表象」(2008年)という論文を通じて、王政復古期演劇が内乱期の忌まわしい記憶をあえて呼び覚まし、その記憶を茶化し、風化させるという機能を果たしていた点で、ときに理性的でときに排他的で党派的でもあった、18世紀の文芸的公共圏の先駆であったことを明らかにしてきた。その研究成果を踏まえて、本研究では、王政復古期演劇が、王位継承排除危機と名誉革命という政体の危機の表象を通じて、どのように新たな表現のためのヴォキャブラリーやパターンを生み出し、18世紀演劇へと連なる新たなジャンルを生み出したかを考察する。従来も、Susan J. OwenのRestoration Theatre and Crisisのように、排除危機と演劇との関連を論じた研究はあったが、それはたいてい排除危機に特化し、演劇をトーリーもしくはホイッグのイデオロギーのプロパガンダとみなしがちであった。

それに対して本研究は、名誉革命後の1690年代に上演された演劇にも注目することで、王政復古期演劇が、1640年代の内乱と排除危機の表象の延長線上にどのようなパターンやジャンルを創造したかを検討し、演劇が、党派のイデオロギーのプロパガンダに留まらない、幅広い意味での政治的役割を果たしていたことを明らかにする。たとえば、1690年代には結婚生活の危機や結婚の破綻をドラマ化した喜劇が人気を博したが、夫もしくは妻の変節や結婚という契約の破棄は、当時容易に、名誉革命そのものの表象と受け止められた可能性がある。そのような可能性に留意すれば、演劇テキストが、トーリーやホイッグのイデオロギーの推進に収斂しない、多様な政治的機能を果たしていたことが明らかになるはずである。以上の点で、本研究は王政復古期のイングランド社会というコンテキストから、社会史・文化史的アプローチによって演劇テキストの政治的側面を解明する試みである。

## 2. 研究の目的

本研究は、王政復古期イングランドにおいて上演された演劇が、王位継承排除危機と名誉革命という政体の危機をどのように表象し、演劇がどのように変容したのかを考察することを課題とする。本研究が当時の政体の危機に注目する理由としては、今日崩壊しつつある二大政党制の起源が、王位継承排除危機を通じて明確化した党派の対立にあり、演劇が政体の危機と党派政治にどのように介入していたのかを考察することは、演劇が、イギリスにおいて初めて政治文化として果たした積極的な役割を改めて前景化できるからである。本研究は、演劇が政体の危機に対峙する上で、どのように恐怖や不安を煽り、諷刺し、その表象を通じてどのように新たなジャンルを生み出したのかを解明することを最終目標とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、王政復古期演劇による政体の危機の演劇的表象を包括的に検討するため、分析対象を二つの時代に分け、年度ごとに一つの時代に集中して、対象の分析をおこなう。まず 1660 年代から 1682 年までに上演された演劇に注目し、演劇が、1640 年代の内乱期の表象と王位継承排除危機への介入を分析する。さらに、1685 年から 1695 年頃まで、とりわけ名誉革命以降の政治的状況の演劇的表象を研究する。その点、初年度と第二年度の分析対象は相互補完的なものである王政復古期演劇による政治的危機の特徴を検討した。

## 4. 研究成果

(1) 第 1 期である 1660 年代から 1682 年までに上演された演劇に注目する。1660 年代から 1678 年までに上演された演劇について、1640 年代の内乱、共和国やオリヴァー・クロムウェルによる護国卿体制をどのように直接、間接に表象したのかを検討する。具体的には、時系列に沿ってその日に上演された興業の情報を記している *The London Stage, 1660-1800* に従って、日々上演された芝居を精読しながら、そこに書き込まれた政治的表象を分析した。ここで注目したいのは、1642 年以前に上演された芝居の改作や再演、王政復古期になってからのレパトリーの再演である。旧作と新作の組み合わせによってどのように新たな政治的含意が現出したのかを考察した。そして 1678 年におけるタイタス・オーツの教皇主義陰謀事件以降、王位継承排除危機が進行していく中で、演劇が、1640 年代の内乱の表象のヴォキャブラリーを再利用し、ときに新たなイメージを創造することで、この政体の危機に介入しようとしたのかを分析した。さらには、王位継承排除危機が進行していく中で、演劇が、1640 年代の内乱の表象のヴォキャブラリーを再利用し、ときに新たなイメージを創造することで、この政体の危機に介入しようとしたのかを分析する。

(2) ジェームズ二世が国王として即位した 1685 年から 1695 年頃までの時代に注目した。とくに、名誉革命という未曾有の政変について演劇はどのように表象したのかを具体的に検討する。そこで、本研究では、とくに名誉革命後の 1690 年代に上演された芝居を包括的に取り上げ、

政治的な機能の分析を行う。この時期に上演された演劇には、トマス・サザンの『妻たちの言い訳』のように、結婚生活の危機や破綻をドラマ化したものが数多く見られるが、そこで前景化されている夫もしくは妻の変節という主題が、当時は、ハリファックス初代伯爵が名誉革命を擁護して「変節漢」(trimmer)と非難されたように、名誉革命と関連して政治的な意味を帯びる可能性もあったことを検討する。さらに、この時代にもうひとつ人気を博した主題として、トマス・シャドウエルの『ベリー市』のように、親子の確執と和解という主題があるが、父と息子の和解というプロットも、名誉革命後には、父である君主と子である臣民の歩み寄りという政治的意味作用を帯びていた可能性を検討した。

(3) 従来、王政復古期演劇は、シェイクスピアの作品などのいわゆる「ルネサンス演劇」と比べて、研究するに値しない三流の作品であると思われがちだった。そのような研究動向に対して、王政復古期演劇を、1640年代の内乱、王位継承排除危機と名誉革命という三度にわたる政体の危機への介入という観点から再検討すると、ときどきの政治的な状況に対応して役割を果たしていた重要な政治的メディアとしての役割に焦点を当てた。さらに、Harold Love は、名誉革命によって政体の危機が乗り越えられたことのために、18世紀には政治的な悲劇が消滅し、市民階級のモラルを主題にした家庭悲劇に取って代わられたと指摘しているが、本研究では、最終的に、王政復古期から18世紀にかけての演劇ジャンルの変容にも新たな光を当てた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

未廣 幹、「トマス・デッカーとフィリップ・マッシンジャーによる悲劇『処女殉教者』に見られる ずらし の戦略」, *Shakespeare Journal* 3巻、2017年、36-45頁。

〔学会発表〕(計1件)

未廣 幹、「彼らはいつまで「寝取られ男のダンス」を踊り続けるのか 『田舎女房』におけるマナーズに対する戦略のアンビヴァレンス」, シンポジウム「Comedy of Manners の系譜 王政復古期から Wilde まで」発表、日本英文学会、2017年。

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし